

まえがき

この本は約2年間かけて書いたツインレイストーリーです。2015年に魂が目覚める出会いがありました。2015年あたりから特に宇宙存在、高次の存在 (Being) からのメッセージを受け取りながらエゴの人生から、自分自身の魂で生きる生き方に変わっていきました。この3次元では体験したことのないような、情報量が壮すぎてこの小さな人間の脳では到底処理が間に合わず、この出来事を咀嚼するのに時間がかかってしまいました。最後の締めくくりの部分を書いているのは2023年秋分を過ぎたころ、もうすぐ第1フェーズが終わります。そして2024年から新たなフェーズが始まるにあたり、「締めくくり」としてこの本を書くように、降ろしたものを表現するのです！」と存在から催促をされたのですが、なかなか筆が進まずにいました。そうしたらソウルメイトやその他周りの人にまでメッセージを降ろし、私に本を書くように伝えて何度も何度も書くまで強いメッセージを送られつづけ、「わかったよ書くよ、ちゃんと書く！」と返事をしてこの本を書いています。

この本を書いている今でさえ、「なぜもつと光の仕事をしななんだ、君が仕事をし

ない分他の人がしなければいけないんだよ」と言われています。その存在は私のガイドの一人であるトートさんです。この本は私の経験やガイドのトートさん、その他の高次の存在のメッセージも含まれています。この本はツインレイのお相手さん、私を取り囲むソウルグループからのメッセージです。

ツインレイに出会おうと『この人は本当にツインレイなのだろうか』といつもこの疑問がつきまとうと思います。

ツインレイかどうか見分ける方法はあなたの頭の片隅にずっといること。その人を目の前にすると自分自身の嫌な部分やネガティブな感情があぶりだされ苦しくなること。何度も何度も頭の片隅から出ていってと願っても、お相手さんと同姓同名の名前を目にしたたりお相手さんを思い出したりするような何かが目の前に現れて、「諦めないで前に進みましょうね！」というメッセージを何度も何度も目にする。不思議なことがいろいろ起こりだすこと。今までの恋愛の小手先の駆け引きやテクニクなどまったく通用しないこと。何よりも自分の精神崩壊が起ること。そしてもう一つわかりやすいヒントが、ツインレイに出会おうと今まで眠っていた魂が目覚めるためそ

れが涙として溢れだすこと。ツインレイに出会いサイレントに入ったときの落ち込みから立ち直れずに泣きつづけるということを経験する人が多いと思いますが、はじめのうちはお相手さんを想って涙が止まらなかったことが、月日が経つごとに音や、ふと目をやった風景や、初めて誰かに会ったのに知っている感覚に涙が出たりするようになります。それはあなたがツインレイに出会ったことにより、魂が目覚めたから。その涙は魂の声、魂が反応しているのです。あなたは魂の片割れに出会った。だから魂が目覚め、魂で生きるように促されるのです。

私がツインレイに出会ったと気づいたころは、まだツインレイの情報など正しいものはありませんでした。スピリチュアルを発信している人でさえも、ツインレイなんてありえない、ただの不倫を肯定するものだというような批判しかなく、誰に相談することもできず、ただただ苦しい日々を過ごしました。

どうしたらこの苦しみから逃れることができるのか……このツインレイプロセスは泣き喚こうと、悲しみに浸ろうと逃れさせてもらえませんでした。ただひたすらに自分自身の内側に目を向けること。これが唯一の苦しみから逃れる方法でした。そこを

抜けた先には、今度は外側に向けてあなたを輝かせていくときが必ず訪れます。目に見えない世界の中でツインレイかな？　どうなのかな？　そんな思いは誰もが持ち、サイレントに入ったときには悲しみに明け暮れるのもいいと思います。でも悲しみに明け暮れるのにもう飽きてしまったら、ツインレイに出会ったんだということ、諦めようと思っても諦められないことに腹を括り1歩1歩、歩んでいきましよう。

ツインレイと出会う人の魂は心がきれいで、逞しく、根底には大きな愛を持っています。そんな魂の持ち主だからこそこの試練にも耐え、本来の自分自身で他者へも愛を分け与える人になれるのだと思います。

ツインレイのプロセスはアセンションの道を歩むこと。

そんな皆様方の道しるべとなりますように。

そしていかなる宇宙からのメッセージも100%正確ではないということを知っておいてください。この本の内容にしてもその他の降ろされたメッセージにしても、すべて人間の視点というフィルターを通したもののなのです。ですから、もしあなたがこれらのページからしっくりくることは、それはあなたの真実です。そうでなかった場合は、愛をそえて宇宙に戻してあげてください。それは単に見方の一つでしかないの

です。私の経験談が少しでも皆様の助けになれば幸いです。この本を手にとっていただきありがとうございます。